

NĀṬYA と NRṬYA

小 林 明 美

rūpaka の定義を下す際に、Dhanañjaya はその種類が十あるとして “daśadhaiva” という表現を用いているが¹⁾、Dhanika はこの “eva” を「限定」(avadhāraṇa) の意味にとり、*Daśarūpaka* の論述対象を「純粋型」(śuddha) の劇に限定しようとする意図のもとに用いられたものと解する²⁾。さらに、Nṛsiṃha によると、Dhanika がこのような解釈を下すのは、劇の分類について起り得べき反論を予想したものであるという。すなわち、「十の数は端数を切りすてて勘定することによつて得られたにすぎないのであるから、[nāṭikā のような重要な種類がほかにもあるというのに、] こういう限定をして何になるのだろうか」という疑問を予想して、「nāṭaka と prakaraṇa の混合」である nāṭikā のような「混合型」(saṃkīrṇa) は論述の対象からはずされることを明言する必要があつた³⁾。

次に Dhanañjaya は、nāṭaka など十種の rūpaka すなわち nāṭya を挙げるが⁴⁾、Dhanika は、さらに次のような反論を予想する。すなわち、「[ある nāṭyaśāstra によると、] 七種の nrṭya がある。それは、ḍombī, śrīgadita, bhāṇa, bhāṇī, prasthāna, rāsaka および kāvya である。このように他にも劇の種類はあるのだから、十種に限定するのは不合理である。」⁵⁾ もしここに挙げられている七種の nrṭya が rūpaka すなわち nāṭya の亜種であるなら、この反論は正しいことになる。

そこで Dhanañjaya は、nrṭya は nāṭya とは違ふとし、その相異点に言及し

1) DR I.7d: [nāṭyam] daśadhaiva rasāśrayam.

2) AL ad loc.: evety avadhāraṇam tu śuddhābhiprāyeṇa, nāṭikāyāḥ saṃkīrṇatvena vakṣyamāṇatvāt.

3) LT ad loc.: nanu nyūnādhikasamkhyāvyavacchedaphalena saṃkhyānenaiva daśeti siddhe kim avadhāraṇa. tatrāha avadhāraṇam tv iti. śuddhir nāma lakṣaṇāsāṃkaryam. nāṭikā hi nāṭakaprakaraṇalakṣaṇasaṃkarād evopadyata iti.

4) DR I.8: nāṭakam saprakaraṇam bhāṇam prahasanaṃ ḍimaḥ/ vyāyogasamavakārau vithyañkehamṛgā iti//

5) AL ad loc.: nanu ca “ḍombī śrīgaditam bhāṇo bhāṇīprasthānārāsakāḥ/ kāvyam ca sapta nrṭyasya bhedaḥ syus te 'pi bhāṇavat//” ityādinā rūpakāntarāṇām api bhāvād avadhāraṇānupapattiḥ.

て、「nāṭya が rasa に基づくのに対し、nṛtya は bhāva に基づく」⁶⁾とする。この個所に対する Dhanika の注釈 *Avaloka* はわかりにくい、Nṛsinha の副注 *Laghuṭīka* は、「対象」(viṣaya)、「本質」(svarūpa)、「演技者」(karty) および「名称」(saṃjñā) の四点について、nāṭya と nṛtya の違いを詳しく述べている。

本論文の目的は、*Laghuṭīka* の記述に基づいて、nāṭya と nṛtya の差異について論じることであるが、その前に両者に共通する基本的性格にふれておきたい。

Dhanika は「anukāra を本質とするゆえに、nṛtya は nṛtta と異なる」⁷⁾と言っており、Dhanañjaya は nāṭya を定義して「nāṭya とは、avasthā の anukṛti である」⁸⁾としている。この“anukṛti”の語は、*Avaloka* で“anukāra”に置き換えられており⁹⁾、接尾辞の ktin と ghañ は同じく bhāva を表わすから¹⁰⁾、この二語は同義語であり、「模倣」の意味を表わす。すなわち、「模倣」ということが、nāṭya と nṛtya に共通する基本的性格ということになる。

Dhanañjaya が nāṭya を定義するために用いる語“avasthānukṛti”は、Dhanika によつて“tādātmyotpatti”の語に置き換えられ¹¹⁾、「同一性が生じること」として理解される。以下、*Laghuṭīka* に従つてこの問題の理解に努めたい。まず、何との「同一性」が生じるのかと言うと、「演じられるべきもの」(abhineya)、すなわち上演の対象である Rāma とか Duṣyanta とかいう人物との同一性が生じる¹²⁾。「模倣」(anukāra)とは、役者と劇の登場人物とが、一体化することであり、この一体化は「せりふ」「しぐさ」など四種の abhinaya によつてなされる¹³⁾。

6) DR I.9a: anyad bhāvāśrayaṃ nṛtyam.

7) AL ad loc.: rasāśrayān nāṭyād bhāvāśrayaṃ nṛtyam anyad eva.

8) DR I.7a: avasthānukṛtir nāṭyam.

9) AL ad loc.: kāvyopanibaddhadhīrodāttādyavasthānukāraḥ.

10) Pāṇ. 3.3.94: striyāṃ ktin [75 bhāve]. *Ibid.*, 3.3.18: bhāve [16 ghañ].

11) AL ad DR I.7a: kāvyopanibaddhadhīrodāttādyavasthānukāraś caturvidhānukāraś caturvidhābhinayena vācikāṅgikasāttvikāhāryarūpeṇa tādātmyāpattir nāṭyam.

12) LT ad loc.: abhinayākṛṣṭam abhineyaṃ tacchabdena parāmṛṣati tādātmyāpattir iti. abhinayasyāroparūpatvāt.

13) abhinaya とは「演技による意味伝達」のことであるが、これが人間活動の全てに対応するものであるという建て前から、伝統的な人間活動分類法に従つて、sāttvika, vācika および āṅgika に分けられる。ただし演技の場合は、衣裳や装飾品など、人間に個有のものではなく、いわば「借りもの」(āhārya)というべきものも用いるので、āhāryābhinaya を加えて、abhinaya は全部で四種あることになる。vācikābhinaya と āṅgikābhinaya は、それぞれ「言葉を用いる演技」と「肢体を用いる演技」

さて、役者と登場人物との一体化の起こる過程は、「重ね置き」(āropa) という着想を用いて説明され、「Rāma などの登場人物の avasthā が、役者の上に重ね置かれる」とされる¹⁴⁾。この点について、*Laghuṭīka* は次のように言っている。『Rāma などの主人公は、自ら舞台に登場しない。なぜなら上演の時には生存していないから。しかしながら、「勇敢で高邁」(dhīrodātta) とか「勇敢で沈着」(dhīraśānta) とかいう「状態」(avasthā) をそなえたものとして登場する。』¹⁵⁾ すなわち、Rāma を演じる役者が、あたかも本物の Rāma であるかのように観客に受け取られるのは、役者が本物の Rāma の「状態」(avasthā) をそなえているからであるとされる。

Nṛsiṃha は、この四つの avasthā を限定要素 (upādhi) であるとし、語が意味を表わす際の機能要因である四つの pravṛttinimitta に比している¹⁶⁾。ある対象が、種 (jāti), 属性 (guṇa), 動作 (kriyā) および固有の名前 (saṃjñā) という四つの upādhi によつて限定されたものとして表わされるように、上演の対象である主人公は、「勇敢にして気高い状態」(dhīrodāttatva), 「勇敢にして烈しい状態」(dhīroddhatatva), 「勇敢にして気楽な状態」(dhīralalitatva) および「勇敢にして心静かな状態」(dhīraśāntatva) という四つの avasthā に限定されたものとして演じられる。けつきよく、nāṭya あるいは nrṭya とは、役者が主人公の avasthā をまねることであると言える。

pravṛttypupādhi との比喻からも明らかなように、同一の劇の中で一人の登場人物が二つ以上の avasthā に限定されてもよく、場合によつては一人の登場人物が四つの avasthā を全部そなえることも、理論的にはあり得る。もちろん、「烈しい」人が同時に「心静かな人」であるわけはなく、一人の登場人物が複数の avasthā をそなえるということは、場面が転換することによつて生じた状況の変化に従つて avasthā が交代するということにほかならない。

Dhanika も言うように、avasthā は jāti と不可離的に結合した guṇa ではな

を意味し、「せりふ」と「しぐさ」を指す。sāttvikābhinaya は、「心の動きに関する演技」という意味で、「涙を出すこと」や「声の調子を変えること」などである。

14) *AL ad DR I.7c*: naṭe rāmādyavasthāropeṇa vartamānatvād rūpakam.

15) *Lṭ ad AL, I.7a*: rāmādināyakā na svarūpeṇopayujyante. abhinayakāle teṣāmasattvāt. kiṃ tu kāvyopanibaddhadhīrodāttādyavasthāvadhrūpeṇa.

16) *Ibid.*: nāyakādīśabdāḥ khalūpādhiprayuktāḥ. upādhyas cāvasthāḥ. ekasyaiva hi dhīrodāttatvadhīroddhatatvadhīralalitavadhīraśāntatvāni bhavanti. atas tā avasthā eva tatpravṛttypupādhyā iti.

い¹⁷⁾。これは、登場人物が生れながらにそなえたものではなく、生涯変わることのない性格とか個性とかではない。初めにある *avasthā* をそなえて登場した人物も状況が変わると他の *avasthā* をそなえることがある。*Dhanika* はこのことを、牛に対して用いられる名称に比している。すなわち、子牛のときは “*vatsa*,” 成牛になると “*vṛṣabha*,” さらに並はずれて大きくなる場合は “*mahokṣa*” と、各成長段階で名称が変わるように、登場人物の *avasthā* も場面の転換によつて交代する¹⁸⁾。*Dhanika* がその例として出すのは、*Bhavabhūti* の *Mahāvīracarita* に登場する *Paraśurāma* の場合である。*Nṛsiṃha* はこれについて次のように論じている。『[登場人物の *avasthā* を表わす] “*dhīrodātta*” などの語は、属性 (*guṇa*) を限定要素とした上で、属性を持つもの (*guṇin*) を指示する。*Paraśurāma* という同じ人物が、*Rāvaṇa* に対しては「気高く」、*Rāma* に対しては最初は「烈しい」が後になると「心静か」になる。[この三つの *avasthā* を表わす語はそれぞれ “*dhīrodātta*,” “*dhīroddhata*” および “*dhīrasānta*” であるが、] もしこれらの語が *jāti* を表わすなら、こういうことは不都合になろう。なぜなら、例えば、[*jāti* を表わす] “*go*” という語によつて表示される「牛」は、決して「水牛」にはならないのであるから。』¹⁹⁾

しかしながら、劇の中心となる人物の *avasthā* がむやみに代わると、劇の統一が破壊され、主題 *rasa* の表出が不可能になる。*nāṭyaśāstra* において登場人物の分類は *avasthā* を基準にして行われ、いわば性格の固定化がなされるが、これは *rasa* の一貫性を意図したものと見えよう。したがって、プロットを導く中心人物 (*prabandha-nāyaka*) には原則として「*avasthā* の交代」はなく、これはもつぱら副次的な登場人物の場合に起こる。ここでまた *Nṛsiṃha* を引用する。『[登場人物のうち] ある [一人] は中心人物であり、その他の者は彼に従属している。従属的人物の場合、中心人物に対する考慮により、[その *avasthā* は] 固定的なものではなくなる。[中心人物やその他の] 大人物を次々に見て、以前には大人物と見なされていた人が小人物になる。しかしながら、こういうことは中

17) *AL* ad *DR* II.5cd-6ab: na jātyā kaś cid avasthitarūpo lalitādir asti.

18) *Ibid.*: dhīralalitādisabdāś ca yathoktaguṇasamāropitāvasthābhidhāyinaḥ vatsavṛṣabhamahokṣādisabdavat.

19) *LT* ad loc.: dhīralalitādisabdāś ca guṇam evopādhikṛtya guṇini vartante. eka eva hi jāmādagṇyo rāvaṇaṃ prati dhīrodātto bhavati. rāmaṃ prati prathamam dhīroddhato bhavati paścād dhīrasānto bhavati. amīṣaṃ śabdāṇaṃ jātyabhidhāyitve naitad yujyate. na hi gośabdavācyo gauḥ kadācid mahiṣo bhavati.

心人物には起らない。彼には考慮すべき他の大人物がいないから。』²⁰⁾ Dhanika も言うように、ある中心人物がある劇の中でとるべき avasthā は一つとされ、初めの avasthā を棄てて途中で他の avasthā をとることは不可とされる。

ただしこれには例外があり、中心人物の場合も、特殊事項に対する śāstra の規定に添うため、今までのとは別の avasthā をとることがある。Dhanañjaya によると、新しい女を愛した男は、前の女に対して、「愛想がよい」か「ずるい」か「恥知らず」かのいずれかとされる²¹⁾。したがって、「気高い」人物も、女出入りに限つては、「ずるい」こともあり得ることになる。このようなことが可能なのは、上にあげた三つの avasthā が、基本的 avasthā に対して常に従属的であるからであるとされる²²⁾。「気高い」人物は女出入りの後でも依然として「気高く」、ここで基本的 avasthā の交代が起こるわけではない。

以上述べたことから明らかなように、nāṭya と nrṭya は「役者と登場人物との一体化」という基本的性格を共にする。次に問題になるのは両者の差異であるが、Nṛsiṃha はこれを、対象 (viśaya), 本質 (svarūpa), 演技者 (kartṛ), 名称 (saṃjñā) の四点から詳しく論じている。

まず第一の相異点は、取り扱い対象にある。すなわち、nāṭya が取り扱うのが rasa であるのに対し、nrṭya が取り扱うのは bhāva であるとされる²³⁾。

Nṛsiṃha は、bhāva と rasa との関係を文章の意味 (vākyaṛtha) と単語の意味 (padārtha) との関係に比し、語の意味が集つて文の意味がもたらされるように、bhāva どうしの結びつき (saṃyoga) から rasa がもたらされるとする²⁴⁾。すなわ

20) *Ibid.*: dvidhā khalu nāyakāḥ. kaścit pradhānabhūtaḥ. anye tadaṅgabhūta itī. tadaṅgabhūtānām nāyakānām tattacchabdādivācyo mahāsattvādiḥ pradhānānāyā-kāpekṣāśvāsād avyavasthito bhavati. uttarottarān khalu mahāsattvān apekṣya pūrvapūrvō mahāsattvatayā grhīto 'pi laghusattvo bhavati. tasmāt tadabhidhāyīśabdo 'pi tatrāvyaavasthitābhidhāyī bhavati. aṅgini tu nāyake naivam ity āha aṅginas tv itī. tasyāpekṣaṇīyāntarābhāvād ity arthaḥ.

21) *DR* II.6cd: sa dakṣiṇaḥ śaṭho dhr̥ṣṭaḥ pūrvām praty anyayā hr̥taḥ.

22) *AL* ad *DR* II.5cd-6ab: vakṣyamāṇānām ca dakṣiṇādyavasthānām “pūrvām praty anyayāhr̥taḥ” itī nityasāpekṣatvenāvīrbhāvād upātāvasthāto 'vasthāntarābhidhānam aṅgāṅginor apy aviruddham.

23) *AL* ad *DR* I.9a: tatra bhāvāśrayam itī viśayabhedāt. Dhanañjaya は rasa を規定して、「vibhāva, anubhāva および vyabhicāribhāva によつて詩から生じせしめられて、歎びをもたらす sthāyibhāva が rasa である」とする (*DR* IV. 46-47ab)。

24) *LT* ad *AL*, I.9a: yady api vibhāvādayas tair atīśayoktyādibhiḥ pratipādyamā-

ち、bhāva と rasa との間には、「生じせしめるものと生じせしめられるものとの関係」(bhāvana-bhāvya-bhāva) があることになる。

nāṭya と nṛtya の第二の相異点は、その本性 (svatūpa) にあるとされる。動詞語根 “naṭ-” の意味は「こまかいふるえ」(avaspaṇḍana) とされているが²⁵⁾、Dhanika はこれを「少しの動き」(kimcicalana) と解し、nāṭya に豊富なのは、身振りによる演技 (āṅgika abhinaya) よりも心の演技 (sāttvika abhinaya) であり、ここに nāṭya の本質があるとされる²⁶⁾。一方、動詞語根 “nṛt-” は「肢体を活発に動かすこと」(gātra-vikṣepa) を意味し²⁷⁾、nṛtya の本質は「身振りによる演技」(āṅgika abhinaya) が豊富なことにあるとされる²⁸⁾。

第三の相異点は演技者 (kartṛ) で、これは nāṭya の場合は naṭa で²⁹⁾、nṛtya の場合は nartaka であるとされているが³⁰⁾、その違いについて、Nṛsiṃha は何も説明していない。

第四の相異点は名称 (saṃjñā) である。“nāṭya” というのは術語であるが、一般の人と同じように “nāṭya” という語を使う³¹⁾。ところが nṛtya の方は、世間では “prekṣaṇīyaka” という名で呼ばれている³²⁾。

AL: *Avaloka*. DR: *Daśarūpaka*. Lṭ: *Laghuṭika*.

The *Daśarūpaka* of Dhanañjaya, with the Commentary *Avaloka* by Dhanika and the Sub-commentary *Laghuṭika* by Bhaṭṭanṛsiṃha, edited with [an] Introduction and Notes by T. Venkatacharya, *The Adyar Library Series*, Volume 97, Madras 1969.

nā vākyaṛthā eva na padārthāḥ. tathāpi teṣāṃ saṃyogād rasotpatteḥ te taṃ prati padārthibhāvaṃ bhajante. raso 'pi tadutpādyo vākyaṛthibhāvati. ato vākyaṛthi-bhūtarasaviṣayaṃ nāṭakādi.

25) Dhātupāṭha 10.12: naṭa avaspaṇḍane.

26) AL ad DR I.9a: nāṭyam iti ca “naṭa avaspaṇḍane” iti naṭeḥ kimcicalanārthatvāt sāttvikabāhulyam.

27) Dhātupāṭha 4.9: nṛtī gātravikṣepe.

28) AL ad DR I. 9a: nṛtyam iti nṛter gātravikṣepārthatvenāṅgikabāhulyāt.....nāṭakāder anyan nṛtyam.

29) *Ibid.*: ata eva tatkāriṣu naṭavyapadeśaḥ.

30) *Ibid.*: tatkāriṣu ca nartakavyapadeśāt.....nāṭakāder anyan nṛtyam.

31) *Ibid.*: loke 'pi ca raṅge nāṭyam iti vyapadeśaḥ.

32) *Ibid.*: loke 'pi(?) raṅge prekṣaṇīyakam iti vyavahārān nāṭakāder anyan nṛtyam.